

## 韓国労働者階級の見解

# 解けない疑問——日本人民の“天皇制”存置

蔡萬洙（労働社会科学研究所所長）

普段でもときどき思い浮かぶことだが、今回の“天皇”交替を契機にもう一度考えてみる。——「日本の労働者・人民は、なぜ“天皇制”という時代錯誤の君主制をそのまま残しているのだろうか？」過去に神格化されていた“天皇”が、敗戦後みずから人間であることを宣言し、神から人間の座に降りてきて“象徴天皇”になったとは言いが、憲法の本文が「第1章 天皇」から始まるのも現代国家の憲法であるとは、到底うなずき難い。

しかも“天皇”交替を前後して、「新聞と放送が明仁と徳仁を競って褒め称え」、「商店街には“平成”や“令和”を活用した販売商法が溢れ」出たなどの報道に出くわすと、本当におのずと首をかしげざるを得ないのだ。

“天皇制”に反対する人びとも多いというのはもちろん知っているが、その中のまた多数は、「もう“天皇”はただ単に“……国の象徴で……国民統合の象徴”、つまり“象徴”に過ぎない」ということに慰められているのではないかという疑念を抱く。

万が一、そのように慰められているのなら、“天皇”は紛うことなく帝国主義・反動の象徴であり、事実上その中心であることを、あまりにも軽視する態度ではないだろうか？ 何よりも“天皇”が象徴している国家とは、まさに独占資本の国家、帝国主義国家であり、「国民統合」とは資本主義的搾取と階級対立を隠蔽する欺瞞的言辞に過ぎないからだ。韓国でも日本でも、資本の報道機関と政治家たちが「国民」を云々するとき、その意図はいつも階級的あるいは派閥的利益を“国民”の利益として覆い隠すものではなかったか？

たとえば、ドイツやイタリアを含むヨーロッパ諸国が第一次大戦と第二次大戦の敗戦を契機に、そして人民革命をつうじて君主制を廃止し共和制に進んだように、日本もまた戦後にすべからず戦争と敗戦の責任を問うて君主制を廃止すべきだった。しかしそれができなかったのは、ブルジョワ国家主義を活用、日本を反ソ・反共基地に育成しようとするマッカーサー司令部の、つまり米帝の企画によるものだったということ、そして“天皇制”日本はまさにそのように作動してきたし、いまも作動しているということ、日本の労働者・人民がよりいっそう真摯に認識すべきではないかという不満がある。

かつての日帝の“治安維持法”の韓国版である「国家保安法」も廃止できていない韓国人民のひとりとして、日本の“天皇制”に対してあれこれ言い立てるのは、もちろん「目糞鼻糞を笑う」類のことかも知れないが、日本の労働者・人民とともに闘おうと思う韓国人のひとりとしては、日本の“天皇制”存置が、そしてとりわけ一九七〇年代以降の“天皇制”廃止・反対運動の後退や無力化が、日本の労働者・人民の安逸と無気力の表われではないかと思われて、疑念と不満が大きいのだ。

韓国の労働者・人民も、日本の労働者・人民も、資本・帝国主義が助長する国家主義・愛国主義を克服し国際主義で連帯する時、そしてそのように連帯してこそ解放を達成することができるという確信のもとに、あえていくつかのことを書いてみた。【翻訳＝土松克典】

（『思想運動』1041号 2019年6月1日号）